

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 19 日現在

機関番号：24506

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720391

研究課題名(和文) 沖縄における墓地開発と宗教実践の相互作用に関する文化人類学的研究

研究課題名(英文) A Study on Interaction between Cemetery Development and Religious Practice in Okinawa

研究代表者

越智 郁乃(OCHI, Ikuno)

兵庫県立大学・地域創造機構・助教

研究者番号：10624215

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、重層的な権力構造の基で行われる現代沖縄の開発の中で墓地開発をとりあげ、墓をめぐる環境の変化と宗教実践の相互作用について考察した。具体的には、墓に用いられるモノの物質性が人々の宗教実践に及ぼす影響について検討することで、人と墓が作用し合いネットワークを構築する過程や構造を明らかにすることを目的とした。

研究成果の概要(英文)：This study discusses interaction between environmental change around tombs and religious practice in the context of development of modern Okinawa, promoted under multi-layered power structure. The focus is specifically on the changes in people's religious practice brought by the change of the material for building tombs. Although cultural anthropology and religious studies have accumulated vast knowledge on the power of materiality as in study of the fetish or Feng Shui, discussion of cooperation between people and tombs through a perception of a tomb as an agency or a materiality was never held. This study reveals the process of networking and its structure between people and tombs, not limited to the time and space of the ritual, but through interaction in the change of materiality as environmental change around tombs.

研究分野：文化人類学

キーワード：沖縄 墓地開発 宗教実践 エージェンシー

## 1. 研究開始当初の背景

沖縄社会は、本土日本と比べて祖先信仰が発達した地域であり、それゆえ祖先祭祀及び葬墓制を通じた祖先観や、祭祀を支える親族集団のあり方が注目されてきた。そこで論じられてきたのは、柳田國男以来の民俗学における祖先祭祀の議論である「死者がいかにか儀礼を経て祖先へと変化して子孫を守る存在になるか」という点であった。他方、民族学的研究においては、親族組織における近代以降の父系血縁イデオロギーの強化が注目され、その動態や他地域への波及の様相が中心的なテーマとなった。

しかしながらこのような議論には、重層的な権力構造の下で生じる人口流動や社会経済的な変化を考える視点が希薄であったことが指摘される。特に、異なる国家権力による作用は、人々の日常生活に大きな変化をもたらし続けている。例えば、沖縄戦により徹底的に破壊された沖縄本島中南部は、戦後の復興と米軍基地建設及び基地経済の影響で流入してきた移住者により都市化が進んだ地域である。1972年の本土復帰を経て、再び日本に組み込まれた沖縄県は、本土経済と開発の波が到来した。それは宗教実践にも影響を及ぼしている。例えば、葬儀会社や墓石業者をはじめとした儀礼への業者の介在が挙げられるが、このような外部の開発アクターによる宗教実践の変容は、民俗学や宗教学において、その多くが儀礼における「外部化」「本土化」というような一方向の変化としてのみ取り扱われる現状にある。ゆえに、相互に折衝する側面が十分に捉えられていない。生きる場の変化という生者の日常生活のリアリティに添いながら、それが宗教実践と相互作用する側面を考慮する研究が必要となる。そこで本研究で注目するのが、「墓をめぐる環境の変化と宗教実践との相互作用」である。祖先の「あの世の家」とも言われる墓は、その「家」の快適さ如何により、祖先は子孫に影響を及ぼす存在となると考えられてきた。そのため、日取りから場所の選定、造営にいたるまで、墓地風水が重視される[渡邊1994]。つまり、子孫が力を得るためには、環境を作り整える人間側の実践が多く含まれているのである。しかし、ここでも同様に、沖縄における戦後の都市計画や墓地の集合化や法人による集合墓地の開発、及び墓に用いられる材質や形状の変化は、行政や本土資本という外来の力による一方的なものに見なされ、現在の墓に関する宗教実践は十分に研究されていない。

## 2. 研究の目的

上記の背景を踏まえて本研究では、重層的な権力構造の基で行われる現代沖縄の開発の中で墓地開発をとりあげ、墓をめぐる環境の変化と宗教実践の相互作用について考察した。

具体的には、墓に用いられるモノの物質性

が人々の宗教実践に及ぼす影響に注目した。特に墓をめぐる環境が変化する過程におけるモノの作用、すなわちモノのもつエージェンシー（行為能力）という側面からの研究を行った。モノを意思作用によって意味づけられるものとしてではなく、アクタント（行為体）として捉え直す必要性が、近年指摘されている。例えば、モノのエージェンシーを関係的で意図を持たない意思の力として考えることで、西欧近代的な存在論における人（主体）/モノ（客体）といった境界を柔軟に考えることができる[足立2009]。もちろん人類学、宗教学においては呪物研究として、モノの及ぼす力に関する研究や墓地風水に関する研究蓄積は豊富にある。しかしエージェンシーを持ったモノとして墓を捉え、人と墓との協働性や相互浸透性を正面から論じることがなかった。本研究では、儀礼という時空間に限定せず、モノの変化という墓をめぐる環境の変化の中で、人と墓が作用し合いネットワークを構築する過程や構造を明らかにすることに注力した。

## 3. 研究の方法

本研究は、(1)現地調査（文化人類学的参与観察・聞き取り調査）と、(2)文献・理論研究に大別して行った。初年度、モノのエージェンシーに関する議論として先行文献・理論研究を行った後、2年目に現地調査を行った。まず、本島都市部における物質文化と都市社会史的側面から墓をめぐる環境変化について調査し、特に地方からの移住者による改葬・造墓の場面における遺骨・骨壺の取り扱い、墳墓の物質的な変化、または墓地の環境変化について参与観察と聞き取り調査を行った。この調査を踏まえて、2年次後半から3年目は再度、人とモノのエージェンシーに関する理論的な検討（具体的には墓と類似する造形物として芸術作品の制作・管理・鑑賞と造墓・管理・墓での祖先祭祀との比較検討）、及び他地域（具体的には本土日本における墓地・墓石の変化）との比較を行った。

## 4. 研究成果

以上の研究から明らかになったことを三点にまとめる。

(1) 墓に用いられる「モノ」から明らかになる墓の概念の変化

戦後の造墓とその後の改修過程において墓に使用されるモノがコンクリート建材から花崗岩へと変化した。それらはいずれも沖縄を取り巻く社会情勢と無縁ではない。とりわけ政治経済を支配した米軍が持ち込んだコンクリートを用いて家屋を建てられるようになると、「あの世の家」たる墓にも次第に用いられるようになった。さらに、復帰後増加した花崗岩を用いた本土式の墓石は、高温多湿の沖縄においてコンクリート材より持ちがよいとして人々に評価された。それぞれの変化過程で共通しているのが「墓によい

ものを用いる」という考え方である。つまり戦後に「外来」した「新しいモノ」が「よいもの」として積極的に利用されているのである。家屋に用いるコンクリート材を墓に用いたことから、少なくとも墓を「家」として考えて、あの世の家にも「よいもの」を用いることで墓と家の永続性が希求されている。そして、墓に「よいものを用いる」という考えが引き継がれたため、より永続性が期待される花崗岩が、コンクリート材の次の墓石として用いられるようになったのである。

(2) 墓に移入された「モノ」：墓における「家」「故郷」の存在

花崗岩の墓石は単に持ちがよいだけでなく、墓の外面に文字を刻むことを容易にした。新しい墓において家名の刻銘及び被葬者の名前が記されるということを通じて、その墓を祀る人々は系譜を確認し、後に世代に参照されている。さらに刻銘は「祀る側」内部だけではなく、外部に対しても情報を発信する標識になった。墓石に氏や出身地を記すことによって琉球王国時代に役人層の子孫であるということや北部集落の出身であるというようなルーツを確認し、発信をしているのである。また文字情報に加えて、墓庭などの周囲の環境に手を加える場合もある。出身地から持ち込んだ木を植えたり、出身地の墓と同じく海の見える場所を選んだりすることで、墓に「故郷」が表現される。これらの造墓における変化は墓をめぐる「故郷や家の物語」として、毎年行われる祭祀を通じて参照され続けている。

以上のことから、墓はモノの変化を経て「死者の家」から「家」や「故郷」の「記憶媒体」として機能変化しつつあることが指摘できる。

(3) モニュメントからアクタントへ

一方花崗岩の墓石が広く普及している本土日本では、死者に対する祭祀は次第に影が薄くなっていき、近年故人となった親族の者に対してのみ愛情を表現する傾向、すなわち単純化されたメモリアリズムという形で祭祀を執り行う傾向が強くなっていると1960年代の調査から明らかにされている[スミス1996(1974)]。90年代以降になると、墓も質的に変化し、祖先祭祀を象徴するよりも自分の生き様を刻み、子孫とのつながりを志向するモニュメントとして考えられるようになった[藤井2003]。

しかしながら、沖縄の墓におけるモノの変化からは、逆に墓自体に「個性」を持たせていく過程が明らかになる。改葬によって墓が故郷から離れ、遺骨以外に元の墓を構成する「もの」を捨て去るがゆえに、新たな墓に「モノ」として「故郷」や「家」の「記憶」を宿らせ、祖先や故郷との繋がりを示している。そうすることで、元の墓・新しい墓という括りを超えて「墓」としての全体性や一貫性を持たせ、場所を隔てて祖先祭祀を継続するために円滑化を図っていると考えられる。つま

り現代沖縄の墓はその変化により、祖先祭祀を継続するための原動力を人に与えるアクタントとして存在しているのではないだろうか。

<引用文献>

足立明「人とモノのネットワーク」、田中雅一編、『フェティシズム論の系譜と展望』、京都大学出版会、2009年

スミス、R. J『現代日本の祖先崇拜 文化人類学からのアプローチ』、前山隆諒、お茶の水書房、1996(1974)年

藤井正雄「現代の墓地問題とその背景」比較家族史学会監修、藤井正雄・義江彰夫・孝本貢編、『シリーズ比較家族第1期 家族と墓[新装版]』、早稲田大学出版会、2003年

渡邊欣雄『風水 気の景観地理学』、人文書院、1994年

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計6件)

①越智郁乃、「墓に用いられるモノと記憶—現代沖縄の造墓からみた墓制の変容—」、『国立歴史民俗学博物館研究報告』、査読あり、第191集、2015年、349-372

②越智郁乃、「芸術作品を通じた人のつながりの構築と地域活性化の可能性—新潟市における芸術祭と住民活動を事例に—」、『アジア社会文化研究』、査読あり、15号、2014年、95-119

③越智郁乃、「グローバル対応力を養う〜タイ王国の産業と人材育成に関する調査をもとにしたプログラム提案〜」、『グローバル人材育成プログラム構築調査2011〜2013年度報告書』、福井大学産学官連携本部、査読あり、2014年、115-123

④越智郁乃、「沖縄米軍返還地における村落祭祀とコミュニティ再編」、『宗教研究』、査読なし、第86巻第4輯、2013年、441-442、

⑤越智郁乃、「八重山における『観光旅行』を通じた台湾認識」、『世新日本語文研究』、査読有り、第4期、世新大学日本語文学系(台湾)、2012年、1-24

⑥越智郁乃、「墓と人のエージェンシー—現代沖縄における墓の変容を事例に—」、『アジア社会文化研究』、査読有り、13号、2012年、13-32

[学会発表](計6件)

①越智郁乃、「軍用跡地利用と沖縄地域社会(3)那覇市新都心地区の共有地利用と資源の変化を事例に」、日本社会学会、第87回日

本社会学会大会、神戸大学、2014年11月22日

② OCHI, Ikuno “Graves that Travel Across the Sea :A Study on Social Mobility and the System of Graves in Contemporary Okinawa” ,Panel“Crossing Boundaries in Okinawan Studies”,代表：小熊誠（神奈川大学）、The 2013 Anthropology of Japan in Japan (AJJ) Autumn Meeting,国際基督教大学、2013年11月9日

③ OCHI, Ikuno “Conserving Our Lands : A Case of the Management of Local Commons after the Reversion of Okinawa” Panel “ On Negative Commons:Bases, Battlefields,Nuclear Testing Grounds and other Military Sites”、代表：クリス・エイムズ（メリーランド大学）田中雅一（京都大学） 14<sup>th</sup> Global Conference of the International Association for the Study of the Commons（国際コモンズ学会第14回世界大会、北富士大会）、富士吉田市、2013年6月5日

④ 越智郁乃 「私たちの土地を守ることー現代沖縄都市部の米軍返還共有地を事例にー」、京都大学人文学研究所「トラウマ経験の組織化めぐる領域横断的研究（代表：田中雅一）」主催ミニシンポジウム『悲劇のコモンズ』、京都大学、2013年2月23日

⑤ 越智郁乃 「沖縄米軍返還地における村落祭祀とコミュニティ再編」、日本宗教学会、第71回学術大会、第14部会、皇学館大学、2012年9月9日

⑥ 越智郁乃 「土地を『守る』ことー現代沖縄における米軍接收土地返還後の開発とエンジェンシー」、日本文化人類学会、第46回研究大会、広島大学、2012年6月23日

〔図書〕（計2件）

①上水流久彦、村上和弘、西村一之、越智郁乃、他6名、風響社、海で〈つながる／切れる〉境域の人類学、2015、（近刊、総数未定）

②小池誠、信田敏宏、越智郁乃、他12名、風響社、生をつなぐ家、2013、338頁（245-265）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

研究者データベース 越智郁乃（兵庫県立大学）

<https://kyodb.hq.u-hyogo.ac.jp/staff/hq/ochiiku/>

お墓のカタチと宗教実践の相互作用ー沖縄の集合墓地を事例にー（福井大学）

<http://www.ura.u-fukui.ac.jp/results/detail.jsp?id=5057>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

越智郁乃（OCHI, Ikuno）

兵庫県立大学・地域創造機構・特任助教

研究者番号：10624215